抄物雑考

土井洋一

一　はじめに

筆者は、「本能寺門前版の版式―毛詩抄をめぐって―」（『学習院大学文学部研究年報二〇』一九七三年度刊）の小論で、主に、版式の差異を手懸かりとした考察を通じ、本能寺門前版の抄物は、『古文真宝抄』・『孟子抄』・『周易抄』・『毛詩抄』・『日本書紀抄』の順に、ほぼ連続して開版されたことを論じ、合わせて、「抄物古活字版目録」を未定稿と断った上で併載した。

版式を手懸かりとする研究では、時を接して、渡辺守邦氏に、「版面を読む」（『文学』五一・四。『古活字版伝説』日本書誌学大系五四に再録）があり、手懸かりとして有効な手段であることを確信するに至った。

右の論をなすに当たっては、次の二点がその機縁となっている。

その第一は、弘文荘荘主、故反町茂雄氏の格別のご配慮によって、同氏が長年に亘って蒐集し、敬愛して止まなかった古活字版四五〇点余りを、昭和四七年並びに四九年の年頭に、一括して売立てるに先立ち、その総てについて、閲覧調査の便宜が与えられたことである。それは、当時の国文学科主任大野晋教授の発案であっ

たが、斯界の研究に寄与する形で全体像が保存されるのは、反町氏にとっても願わしいことであったに違いない。一連の成果は、反町文庫として、日本語日本文学科に帰属している。爾来四半世紀が経過した今、ことの次第の一端を記しておく。

先の小論で、木室二兵衛・陰山玄佐の開版本に一部言及することができたのも、寛永元年に刊行の『明徳記』調査が切っ掛けであった。

その第二は、武田薬品工業の厚意によって、杏雨書屋が所蔵する医書の閲覧利用が許されたことである。その成果を取り入れることで、「抄物古活字版目録」の作成が可能となったとも言える。但し、所蔵書整理の段階で、非公開であったため、これに拠って立てた項目について、敢えて所蔵者名を伏せる処置を取った。

茲に、ともに記して謝意を表する。

本稿では、加除訂正を施した目録を再録し、木室二兵衛・陰山玄佐の開版本への言及に関して、鈴木博氏から提出された疑問について私見を述べることとする。

二　古活字版目録

掲載に当たっての方針は前稿に倣う。

書名は原則として巻頭に拠る。

有刊記版は原刊記を「　」で記し、無刊記版は匡郭及び抄文の行数によって区分する。書誌的には開版年月の差も考慮すべきであろうが、ここでは版式面での比較的明瞭な差異に基づいて区分するに留めた。

従って、開版の先後とは直接関係しない。なお、原刊記中の「刋」を「刊」で代用した。

配列は国書（但し、原和文体を除いた）・漢籍に次ぎ、仏典・医書を別掲する。特に医書は、特殊語彙の史料としても、今後の研究に俟つところが大きい分野であるから、仮名書き文献は、いわゆる抄物の形態を採らないものも含めた。

前稿では、その大半を川瀬一馬博士の『増補古活字版之研究』（以下〈川瀬〉と略称）に依拠し、影印本『中華若木詩抄』（勉誠社刊）所収の「抄物研究図書論文目録」（中田祝夫・今村千草編）記載の諸論文などで補ったものなどについては、原則として注記を加えなかった。

本稿では、『弘文荘古活字版目録』（弘文荘一九七二年刊。以下〈目録〉と略称）に加え、新たに

『杏雨書屋蔵書目録』（武田科学振興財団一九八二年刊。以下〈杏雨〉と略称）

『龍門文庫善本書目』（坂本龍門文庫一九八二年刊。以下〈龍門〉と略称）

柳田征司「医家の抄物・一斑」（『近代語研究』六。一九八〇年刊）

同右「医家の抄物」（『国語史への道』下。一九八一年刊）

同右「医家の抄物（第二類追補）」（『愛媛大学教育学部紀要第二部人文・社会科学』一四。一九八二年刊）

同右『室町時代語資料としての抄物の研究』（一九九八年刊）

同右「抄物目録稿（原典漢籍集部一）」（『抄物の研究』一〇。二〇〇〇年刊。以下、一括して〈柳田〉と略称）

など、その後の研究成果も極力援用すべく努めたけれども、なお未見の版もあり、整版との関係など、依然として調査の要ある未定稿であることに変わりはない。

錦繍段鈔　三(五)巻　〔月舟寿桂〕

○「寛永六年仲呂上旬　二條観音町中嶋久兵衛開之」。双辺一二行本。

覆刻整版に、寛永九年版（極稀に配字を改め、改変を施す）があり、これを基に経文を大字に改め、抄文を覆刻する同二〇年版・同補刻後印本（慶安二年後印本）がある。

○「于旹元和九癸亥暦中秋上旬　玄佐開板」。単辺一三行本。

○無刊記。単辺一三行本（二版）。

○無刊記。双辺一三行本。

○無刊記。双辺一四行本（二版）。

〈川瀬〉未載の別版に、国立国語研究所蔵の完本並びに巻一～四の有欠本がある。同種活字・同一摺版全四面を使用し、配字を等しくする再版本。完本一36、二6、18、三17、五5、22の計六丁、有欠本二6、12、四3の計三丁は、初版を使用する。初版の序1の版心「錦抄序」に対し、完本のみ「錦抄巻序」とあり、初版本（巻五）に使用した摺版襲用の名残りを留める。従って、完本の序1は、再版中の初印である。

續錦繍段鈔　五巻　〔継天寿戩〕

○無刊記。双辺一三行本。

整版に、承応三年版がある。

中華若木詩抄　四巻　如月寿印

○無刊記。双辺一七行本。

○無刊記。双辺一八行本。

○無刊記。双辺一九行本。

整版（三巻）に、寛永一〇年版・（覆寛永）正保四年版・延宝七年版がある。

日本書紀「神代巻」抄　二巻　清原宣賢

○無刊記。単辺一四行本。

版心に、上・中・下とあり、三巻本とも呼ばれているが、上巻巻頭「巻第一」下巻巻頭「巻第二」と、次掲有刊記版踏襲の名残りを留めており、二巻三冊本と称してよかろう。

○「於洛陽本能寺前町開板」。双辺一六行本。
享禄四年の転写本に基づく旨の識語を有する寛永一七年刊整版『日本紀神代抄』一一巻本は別系統。

御成敗式目抄　二（三）巻　清原宣賢
諸版巻頭に書名なく、尾題に「御成敗式目抄」とある。
○「元和第七年霜月吉辰」。単辺一二行本。
○「寛永元年八月吉辰」。単辺一二行本。
○　無刊記。単辺一二行本（四版）。
〈川瀬〉に第二種二版・第三種二版とあるもの。但し未見で、四版の別未勘。
○　無刊記。単辺一三行本（三版）。
〈川瀬〉に第四種三版とあるもの。この内イ版とあるものは数箇所濁点付活字を使用。三版の別未勘。整版に、寛永一二年版・同二一年版などがある。慶安元年版などの平仮名交り本は別系統。

職原私抄　二巻　清原宣賢
○「寛永四年丁卯九月吉辰　二兵衛尉之」。双辺一二行本。
覆刻整版に寛永五年版がある。

庭訓[往来]鈔　二巻
○　無刊記。双辺一二行本。
○　無刊記。単辺一三行本。
東洋文庫蔵本がある。〈川瀬〉は前揚の版と誤認。整版に、寛永八年版・同一六年版・慶安二年版・承応二年版（平仮名交り本）などがある。

洛陽大仏鐘之銘抄　一巻
○「寛永三年秋八月吉辰」。双辺本。
〈川瀬〉未載。両足院蔵本がある（〈柳田〉）。

周易抄　六巻　柏舟宗趙
○「於洛陽本能寺前開板」。双辺一五行本。

尚書[抄]　一三巻　清原宣賢

○「于時寛永元甲子歳卯月吉辰　二兵衛開板」。単辺一三行本。

毛詩抄　二〇巻　清原宣賢

○「於洛陽本能寺前町開板」。双辺一六行（混一五行）本。

大學章句[抄]　一巻　清原宣賢

○無刊記。単辺一一行本。

○無刊記。無辺一二行本。

○[寛永二年]刊。単辺一二行本。

○無刊記。単辺一二行本。

○無刊記。双辺一二行本。

○無刊記。単辺一六行本。

覆刻整版に、相互覆刻の寛永七年版（四版）（長沢規矩也『図書学参考図録二』）・無刊記版がある。

中庸(私抄)章句[抄]　二巻　清原宣賢

○無刊記。単辺一一行本。

○「于時寛永二暦重光作噩初春吉辰／本屋／意齊　開板焉」。単辺一二行本。

○「于時元和七暦重光作噩仲冬吉辰／本屋／二兵衛　開板焉」。単辺一三行本。

○無刊記。単辺一三行本。

○無刊記。単辺一六行本。

覆刻整版に、相互覆刻の寛永七年版・同九年版・無刊記版がある。

論語抄　一〇巻　清原[秀賢]

○無刊記。単辺一八行本。

○無刊記。双辺一八行本。

孟子[抄]　一四巻　清原宣賢

○「於洛陽本能寺前開板」。双辺一八行本。

完本に、桜山文庫旧蔵本がある。

史記[抄]　一九巻首一巻　桃源瑞仙

○「寛永三丙寅年閏四月下旬　陰山玄佐行板」。双辺一二行本。

三略秘鈔　三巻　清原宣賢

○無刊記。双辺一三行本（二版）。

毎行二三字本と二四字本とがある。前者は〈川瀬〉未載。整版に寛永四年版がある。

六韜秘抄　六巻　清原宣賢

○「于皆寛永元甲子年初冬吉辰　玄佐開板」。単辺一二行本。

（標題徐状元補注）蒙求［抄］　七巻　清原宣賢

○［元和末年以前］刊。単辺一三行本。

○　無刊記。双辺一三行本。

〈川瀬〉未載。従来同一の版とされていたもののうち、京都大学国語学国文学研究室蔵本は同種の活字を使用するが、版心・匡郭など版式を異にする異植字別版で、こちらが初版か。再版の覆刻整版に、寛永一五年版（一〇巻。無刊記後印本）がある。

荘子［抄］　一〇巻　清原宣賢

○［寛永元年以前］刊。単辺一三行本。

尚書抄並びに「于時寛永元甲子歳仲夏下旬　開板之」とある古活字版明徳記三巻に類似の版式。加えて、後者の阿波国文庫旧蔵本（〈目録〉三二四）原表紙裏張りに、古活字版荘子抄（八17オ――上表、八18ウ――中表、八16ウ――中裏、九10オ――下裏）・尚書抄（一〇4ウ――上裏、一〇1ウ――下表）の摺遺りを用いる。整版に正保二年版（寛文一〇年後印本）がある。

長恨歌［抄］　一巻　清原宣賢

○　無刊記。双辺一〇行本。

〈川瀬〉未載。東大蔵本がある（〈柳田〉）。

○　無刊記。双辺一一行本（四版）。

〈川瀬〉に第一種本とあるもののうち、東洋文庫蔵本は同種活字の異植字別版である。

○　無刊記。単辺一二行本（二版）。

〈川瀬〉に龍門文庫蔵本を双辺一二行本と記す（八〇八頁、〈龍門〉も同じ）が、図録篇に拠ると単辺である。この版式のものに、次掲本と配字をほぼ等しくする別版があり（〈目録〉三三五）、無刊記の整版本は、これに基づく覆

刻である。

○　無刊記。単辺上下双辺一二行本。

四河入海　二五巻　笑雲清三

○　無刊記。単辺一七行本。

三體詩[抄]　七絶四巻（巻一之一～四）・七律一巻（巻二之一～四）・五律一巻（巻三之一～五）

説心素隠

巻頭書名「増註唐賢絶句三體詩法」「唐賢七言律詩三體家法」「増註唐詩五言律句三體家法」、元和八年の原跋（巻二之四末尾）の下に「素隠抄」とある、いわゆる三体詩素隠抄。

○　[元和八年]刊。双辺一七行（混一六・一八行）本。

覆刻整版に、寛永一四年版（「西田勝兵衛尉開板」本。「野田庄右衛門」後印本）がある。

○　「寛永第三[丙寅]季秋念七　木室二兵衛尉　刊行了」（巻一之三末尾）。単辺一六行（混一七・一八行）本。

○　「寛永第三[丙寅]季秋念七　木室二兵衛尉　刊行了」（巻一之四末尾）。単辺一六行本。

大阪市立大学新村文庫蔵本（巻三之五欠、巻一之一整版取合わせ本）がある（鈴木博『国語学叢考』一三九頁）。〈目録〉三三六（巻二之四以下存の有欠本）も同一。

三體詩絶句鈔　六巻　塩瀬宗和

○　[元和六年]刊。双辺一二行本。

覆刻整版に、無刊年村上平楽寺版がある。訓点・濁点の類を新添せず。

（魁本大字諸儒箋解）古文真寶[後集抄]　一〇巻　笑雲清三

○　「元和三年丁巳孟春如意珠日／於雒陽刊行焉」。単辺一八行本。

○　「於洛陽本能寺前開板」。双辺一八行本。

ともに大永五年の原跋を有し、尾題に「笑雲和尚古文真寶之抄巻之幾終」とあるもの。後者の覆刻整版に、無刊記版がある。

（魁本大字諸儒箋解）古文真寶［後集抄］一〇巻

○　無刊記。双辺一一行本。

○　無刊記。単辺一三行本。

東洋文庫蔵本などがある。〈川瀬〉は前揚の版と誤認。笑雲抄とは別系統であり、寛永七年版（相互覆刻二版）などの整版五巻本とも別。

（禅宗）無門関［抄］　二巻　〔雪庭春積〕

○　「元和八戊戌歳立夏吉辰　洛陽　存故刊之」。双辺一二行本。

○　「寛永元甲子年立夏吉辰　加校合　洛陽重刊」。双辺一二行本。

○　「寛永二年極月吉辰　加校合　洛陽重刊」。双辺一二行本。

○　「寛永五年初夏上旬加再校　洛陽重刊」。双辺一二行本。

○　「寛永八辛未年中冬下旬加再畢　於洛陽刊之」。双辺一二行本。

いわゆる春夕抄で、覆寛永元年刊本の整版に、寛永二年版（相互覆刻二版）があるほか、同一○年版・正保三年版（万治元年刊後印本）・（覆正保）慶安元年版などがある。

眞歇和尚拈古之抄　一巻　〔万安英種〕

○　「寛永十九年卯月　吉日／開判之者也」。単辺一三行本。

〈川瀬〉未載。整版に承応二年版がある。

（類證辨異）全九集　七巻　曲直瀬道三

○　無刊記。単辺一二行本。

濁点付活字混用。配字を等しくする整版に、元和八年刊単辺一二行本（無刊記後印本）がある。

○　［寛永元年以前］刊。双辺一二行本。

○　無刊記。双辺一二行本（二版）。

〈川瀬〉未載の別版に、有欠本（巻一・二・五・七存）がある（〈目録〉二五五）。

○　無刊記。単辺一二行本。

『国書総目録』が慶長一三年版として登載する杏雨書屋本は写本（〈杏雨〉杏五〇七）の誤認か。

整版に、（覆）元和八年刊単辺一二行本（無刊記後印本）・寛永一〇年孟春刊双辺一六行本（二版・明暦四年刊後印本）・同年孟夏刊双辺一二行本・敦賀屋久兵衛刊無刊年単辺一五行本・万治四年刊単辺一六行横本（元禄一二年刊後印本）・無刊記単辺一五行横本などがある。

同名（四巻）の文政元年版は、本抄に先行して成立した月湖著田沢仲舒の校になる漢注本。

日用灸法　一巻　曲直瀬玄朔

○「寛永八辛未歳仲春吉辰重刊」。双辺九行本。

整版に、寛永一〇年版・同一三年版・同一九年版・承応四年版・正保三年版などがある。

（新刊）針灸指南　二巻

○［慶長一三年以前］刊。双辺一〇行本。

察病指南抄　三巻

○無刊記。双辺一二行本。

○無刊記。単辺一三行本。

整版に、慶安四年版・明暦二年版・無刊記本などがある。

濟民記　三巻　曲直瀬玄朔

○「元和己丁初春日於大黒町刊」。単辺一二行横本。

〈川瀬〉未載。杏雨書屋蔵本がある（《杏雨》乾五四五三）。濁点付活字混用。次掲本は版心の左右に罫を付さないが、罫を付し配字を等しくする別版である。

○無刊記。単辺一二行横本。

無刊記の整版に、単辺一二行横本・単辺一六行横本・単辺一七行平仮名交り横本などがある。

格致餘論抄　四巻

○「寛永三年歳舎丙寅初秋良日　梅寿刊行」。双辺一二行本。

整版（五巻本）の寛永一三年版・同二一年版・万治三年版は、独自の増補本文を共有する。

醫方大成論抄　二巻　〔曲直瀬玄朔〕

○　元和九年版。双辺一二行本。

〈柳田〉京大付属図書館目録。但し、未確認）。文学部の受入記録に「三冊。重刊」とあるものか。但し、所在不明。

○　無刊記。双辺一三行本（二版）。

（長沢規矩也『図解和漢印刷史』）。

（新刊勿聴子）俗解八十一難経抄　二巻　曲直瀬玄朔

○　「于時寛永元甲子歳菊月上旬吉辰」。双辺十三行本。

〈川瀬〉未載。叡山文庫蔵本がある（〈柳田〉）。

萬病回春抄　三巻　菅玄東　吉田意庵

○　〔慶長一八年頃〕刊。単辺一一行本。

明醫雑著抄　三巻

○　「梅寿刊行」。双辺一二行本。

○　無刊記。双辺一二行本。

整版に、慶安二年版・同四年版・明暦二年版などがある。

遐齢小兒方　一巻　曲直瀬道三

○　〔寛永七年以前〕刊。双辺一二行本。

覆刻整版に、寛永七年版があるほか、承応二年版・貞享五年版がある。

授蒙聖功方　二巻　曲直瀬道三

○　無刊記。無辺一四行横本。

無刊記の整版に、一三行横本・一五行横本などがある。

恵徳方　三巻　曲直瀬玄朔

○　〔寛永四年以前〕刊。単辺一二行横本。

整版に、寛永四年版・無刊記横本（寛永八年刊後印本）・寛永一〇年版・正保四年版・明暦三年版などがある。

局方發揮抄　二（三）巻

○「于皆寛永五戊辰暦長夏下旬　刊行之」。双辺一一行本。

○「寛永五戊辰年七月吉日」。双辺一二行本。

整版に、寛永二〇年版がある。

延壽撮要　一巻　曲直瀬玄朔　平仮名交り本

○「意斎道啓刊行」。無辺九行本。

○　無刊記。無辺一〇行本。

〈川瀬〉未載。杏雨書屋蔵本がある（〈杏雨〉乾九〇五）。次項と配字を等しくする同種活字使用の異植字版。

○　無刊記。単辺一〇行本。

○　無刊記。無辺一一行本（三版）。

整版に、寛永七年版・同九年版・万治三年版などがある。

諸疾禁好集　一巻　梅寿

○「寛永三年応鐘上澣梅寿撰刊」。単辺一三行横本。

同一刊記の整版がある。寛永九年版・（覆寛永）慶安三年版（二版）は別。

諸病食性禁好物集　一巻

○　無刊記。双辺有界一〇行本。

〈川瀬〉未載。『玉英堂稀覯本書目』一九〇号所載本。

美濃醫書　一巻　曲直瀬道三

○　無刊記。無辺一四行本。

本草序例抄　七巻官爵一巻　吉田意庵

○「元和九年癸亥五月吉辰三条白壁町馬淵屋吉兵衛開板」。双辺一三行本。

覆刻製版に、寛永一八年版がある。

和名集并異名製劑記　二巻　梅寿

○「元和九年歳舎癸亥季春良日梅寿疏之以刊行」。双辺一二行本。

○「寛永二乙丑歳初夏吉日」。単辺一三行横本。

前者は濁点付活字混用。整版に、寛永九年版・同一一年版・正保三年版・承応二年版などがある。

三　鈴木博氏の疑問に答える

鈴木博氏は、その著書『国語学叢考』（清文堂出版一九九八・九刊。以下、《叢考》と略称）に収められた「『三体詩素隠抄』について」において、古活字版三種に関する書誌学的な考察を展開する中で、「土井洋一氏説について」の見出しを立てた一項を設け、次のように述べられた。その全文（一五四～一五六頁）を転載する。

『続抄物資料集成』第十巻（平成四年十二月、清文堂発行）に所収の土井洋一氏論稿「荘子抄について」の中で、古活字版『荘子抄』の開版年、開版者に関して次のような指摘がある。

A　開版の下限は寛永元年晩秋以前。（一一八頁）

B　陰山玄佐の刊行である可能性が高い。（一一九頁）

A・Bの論拠についての氏の説は、左のとおりである（傍線鈴木）。

『荘子抄』の植字・印刷には全四面の摺版が用いてあるが、その四面中三面が『蒙求抄』の無刊記単辺一三行再版本に使用の全三面と同一、更に、四面中二面が『六韜秘抄』の「于時寛永元甲子年初冬吉辰　玄佐開板」単辺一二行本に使用の全三面中二面と同一であり、三版に共通使用されている摺版一面の欠損状況から『蒙求抄』の開版が先行し、『荘子抄』がこれに次ぎ、『六韜秘抄』が後出本と知られ、従って、『荘子抄』開版の下限は寛永元年晩秋以前と推定される。

また、『荘子抄』の摺り遣り四葉が、『尚書抄』の「于時寛永甲子歳卯月吉辰　二兵衛開版」単辺一三

行本の二葉とともに、『明徳記』の「于時寛永甲子歳仲夏下旬　開版之」単辺一三行本の阿波国文庫旧蔵本原表紙裏張りに用いてあることも傍証となる。

以上から、本古活字版は陰山玄佐の刊行である可能性が高い。陰山玄佐と木室二兵衛は、ともに当時を代表する書肆で、いずれも清原宣賢の手に成る上記抄物の他、同じ寛永三年に、前者が桃源瑞仙の『史記抄』を、後者が説心素隠の『三体詩抄』を開版するなど、抄物の出版に積極的であった。

右の中で、『荘子抄』の摺り遺り四葉と、木室二兵衛の寛永元年開版『尚書抄』の二葉とが、寛永元年版『明徳記』の裏張りに用いられている旨が記されているが、⑦『荘子抄』と『尚書抄』とは開版者が異なるのに、それらの摺り遺りが別版『明徳記』の裏張りにどうして用いられているかについて格別の説明がない。『明徳記』の開版者が誰であってもこのようなことが生じるのだろうかという疑問に対しても説明のほしいところである。

Aについては、前述したところによって寛永三年九月二十七日刊記のbの『三体詩抄』の前見返し、後見返しの裏打紙として、この『荘子抄』の巻九および巻十の断簡が使われているので、『荘子抄』の少なくとも巻九、巻十の摺られた時期は、寛永三年の頃か、それに極めて近い頃かとする可能性はないのだろうか。そのような微かな疑問が湧くのである。

Bについては、寛永三年版『三体詩抄』の刊行者は、前記のように木室二兵衛なので、陰山玄佐と木室二兵衛とが摺り遺りの反故紙を譲り受け渡しするような仲であったかと思われるが、あるいは、ひょっとして『荘子抄』巻九、巻十の出版者は木室である。つまり『荘子抄』全体から見れば陰山と木室との共同出版である、ということがあり得るのであろうか。しかしこれはあまりに大胆過ぎる揣摩臆測かも知れない。

この論は、既発表の二編の論文である「『三体詩素隠抄』小考」（『大谷女子大国文』一三号）と「『三体詩素隠抄』追考」（『滋賀大国文』三二号。以下、《滋賀大》と略称）とを再構成されたものであり、今問題とする項は《滋賀大》で論じられている。先後で論旨に関わる差異は認められないが、ここでは再録された《叢考》の文言に添って見ていくこととする。なお、引用中の傍線の中、実線部は鈴木氏が加え、点線部は土井が新添した。

鈴木氏によって引用された部分は、古活字版『荘子抄』一〇巻一〇冊本について解説した本文の第一文を除く全文である。なお、第一文中にある「花口魚尾」は「黒口魚尾」の、また、引用された第一文中の「全四面…その四面中…四面中二面」は「全六面…その六面中…六面中二面」の誤り。この機会に訂正する。

四周単辺、花口魚尾、毎半葉一三行。無刊記本であるが、左により寛永元年晩秋以前の開版と知られる。

ここでの論述（以下、〈解説〉と略称）は、第一文の末尾にも注記したところであったが、これに先立って考察した「本能寺門前版の版式」（以下、〈年報〉と略称）に基づき、その骨子を述べたものであった。しかるに、〈年報〉については、《滋賀大》《叢考》ともに一切触れるところがない。その意図するところは量りがたいが、私見を述べるためには不可欠であるから、随時引用し、〈解説〉の論旨を補強していくこととする。

なお、版式を通しての考察では、主に、摺版の版心、並びに匡郭のうち版心と常に固定して用いられる上枠を対象として、摺版の差異や植版の順序を探る手懸かりとした。また、〈年報〉と同じく、版心の象尾と魚尾との間を、左右の罫線と直角に交わる一線で画する摺版をA型と呼び、この一線を欠く摺版をB型と呼んで区別する。魚尾も、花口魚尾をa型、黒口魚尾をb型と呼んで区別する。

更に、植版の工程に一定の方針が認められる場合には、用いられた植版の配列に応じて、

(一) 一種類の工程からなる単一規則型

イ 二面の交互使用型　　ロ 三面の交互使用型　　ハ 四面の交互使用型

(二) 二種類の工程からなる複合規則型

ニ イロの混用型　　ホ イハの混用型　　ヘ ロハの混用型

の二類六種に区分する。このような規則的な配列が認められないものを不規則型とする。

以下、《叢考》での論の展開に添って私見を述べる。

鈴木氏は、ＡＢの指摘に先立ち、㋐で『荘子抄』『尚書抄』『明徳記』の関わりについての論を問題とされた。私は、〈年報〉で、関連する他の抄物も加え、版式の比較検討を行った結果、次のように二つのグループに分けられると結論づけた。それをここでは仮に、ⓐ陰山玄佐グループ、ⓑ木室二兵衛グループと呼ぶことにしよう。

〈年報〉での考察で、ⓐグループに属するのは

①『蒙求抄』無刊記。単辺一三行。Ａｂ型三面。不規則型。複数巻平行作製可。

②『荘子抄』無刊記。単辺一三行。Ａｂ型六面。不規則型。複数巻平行作製可。

③『六韜秘抄』寛永元年一〇月玄佐開板。単辺一二行。Ａｂ型三面。不規則型。複数巻平行作製可。

④『史記抄』寛永三年閏四月下旬陰山玄佐板行。双辺一二行。Ｂａ型四面。不規則型。複数巻平行作製可。

の四本であった。

④を除く①②③の三本に、密接な関係が認められる。その共通点の第一は、この三本に共通の摺版が用いられていることである。即ち、①が使用する摺版全三面と、②が使用する全六面中三面が同一であり、さらに、両者が共通に使用する三面中の一面と、②が個別に使用する三面中の一面は、③が使用する全三面中の二面と同一であり、加えて、三本が共通に使用する摺版一面の欠損状況から、摺版は①②③の順に襲用されており、従って、三本はこの順に開版されたと推定される。この点は、〈解説〉でもそこでの論拠として引用したところであるが、第二の共通点に、組版の工程がある。三本は、先の二類六種の規則型に属さない不規則型であり、複数巻の平行作製も可能であった（〈年報〉二四四、五頁参照）。④は些か様相を異にしており、B型の摺版であって他の三本との共有は認められないけれども、新彫ではない。しかし、先の第二の共通点であった、組版の工程が不規則型であり、複数巻の平行作製が可能であるという点では一致している（〈年報〉二四五頁参照）。

ⓑグループに属するのは

⑤『尚書抄』寛永元年四月二兵衛開板。単辺一三行。Ａａ型一面、Ａｂ型二面。(一)イ型→(一)ロ型。単数巻継続作製。

⑥『明徳記』寛永元年五月下旬開板。単辺一三行。Ａａ型一面、Ａｂ型二面。上・下(一)イ型、中(二)ニ型。単数巻継続作製。摺版三面は総て⑤を襲用。

⑦『三体詩抄』寛永三年九月二七日木室二兵衛尉刊行（刊記。巻一之三末）。単辺一六（混一七、一八）行。Ａａ型三面。(一)ロ型。単数巻継続作製。

⑧『職原私抄』寛永四年九月二兵衛開之。双辺一二行。Ｂａ型三面使用。(一)イ型→(一)ロ型。単数巻継続

作製。

の四本である。

⑤の摺版全三面が⑥の摺版全三面として襲用されていて、この点は、ⓐグループで第一の共通点として挙げた特徴と一致するけれども、⑦⑧はそれぞれ別種の摺版を使用していて、全同ではない。他方、第二に挙げた組版の工程は、四本いずれも㈠ロ型を主体とする規則型に属し、これはⓐグループとは対立する工程での共通点をなしている（〈年報〉二四二～二四四頁参照）。

今一本、元和九年玄佐開板『錦繡段鈔』巻一、二の版式について、高羽五郎氏から提供されたコピー（巻三欠）に拠って述べる（◊とする）。

当該本の版式は、Ａａ型一面（●とする）とＡｂ型六面（初出の順に○△□☆▽◇とする）とからなり、次頁に挙げた表一のように、各巻五面を使用し、巻一は㈠イ型→不規則型、巻二は不規則型→㈠ロ型と変化していて、ⓐⓑ両グループに跨る統一性を欠く工程となっている。結論は完本による調査を経てからとする。今一つ、先にⓐⓑのグループそれぞれで襲用された摺版がここでも使用されている。その大要を表二で示す。

表二では、襲用の先後関係の明らかなものを↓で、保留を―で示した。◎はＡｂ型で①②に使用。巻丁の数値は初出。

『荘子抄』の摺版に関して、〈年報〉において、「尚書抄の二面と同趣であり、版心の活字も近似するけれども、同一の摺版はない」（二四四頁）とする判断を下したが、◊の調査で表二のように改めた。

なお、版心と固定して用いられる匡郭の上枠に、まま差し替えが認められるが、ここでは問わない。

さて鈴木氏は㋐で、開版者の異なる②⑤の摺遣りが⑥に「どうして用いられているかについて」の説明を

表一　◇0 工程

丁	巻	序・目	巻一	巻一	巻二	巻二
1	43	●	○	●	△	●
2	44	●	△	□	△	●
3	45	●	○	□	△	△
4	46		□	●	△	□
5	47		△	●	△	●
6	48		□	●	●	△
7	49		△	●	△	□
8	50		□	●	●	△
9	51		△	□	△	●
10	52		□	●	□	□
11	53		△		●	△
12	54		☆		●	●
13	55		□		□	□
14	56		△		□	△
15	57		□		□	●
16	58		△		□	□
17	59		□		□	△
18	60		△		●	●
19	61		□		●	□
20	62		△		□	△
21	63		□		●	△
22	64		△		●	▽
23	65		□		□	□
24	66		△		□	△
25	67		□		△	▽
26	68		△		●	□
27	69		□		□	△
28	70		☆		△	▽
29	71		☆		●	□
30	72		□		□	△
31	73		△		●	▽
32	74		△		△	□
33	75		△		□	◇
34	76		△		●	△
35	77		△		□	▽
36	78		□		△	□
37	79		□		●	◇
38	80		☆		□	▽
39	81		☆		△	△
40	82		☆		●	□
41	83		☆		□	◇
42	84		●		△	▽

表二　摺版襲用

	●	○	△	□	☆	▽	◇	◎
◇1蒙求		○序2↓				▽序4↓		◎序1↓
◇2荘子		○一1—	△五29—	□五28—		▽一7—	◇一3—	◎七1
◇0錦繍	●序1↓	○一1	△一2↓	□一4…?…	☆一12	▽二64↓	◇二75	
◇5尚書	●一1↓		△一3↓			▽一4↓		
◇6明徳	●上1		△上2			▽上3		
◇3六韜		○図1		□序1			◇序5	

求められたのであるが、〈年報〉は裏張り（原装）に使用されている事実を報告したのであって、仮説を立てたのではない。しかるべき説明は、このような事実の積み重ねがなされた上で可能となろう。ここで補った、ⓐⓑ両グループの枠を越えての摺版の共用が是認されるならば、説明に向けての有力な事実を、一つ加えたこととなる。説明のないことは事実の否定には繋がらない。

次に、鈴木氏は疑問Aとして、『荘子抄』の少なくとも巻九、一〇の印刷時期を、裏張りに用いた寛永三年版『三体詩抄』の刊行時期まで遅らせる可能性を示された。小論で、下限の論拠の第一に挙げたのは、『荘子抄』の摺版が寛永元年刊『六韜秘抄』に襲用されていることであった。二本共に複数巻の平行植字が可能な不規則型ではあるが、摺版の欠損状況から、『六韜秘抄』の製作は『荘子抄』全巻作製後であったと見なされる。加えて、今回示したように、『尚書抄』への襲用が見られるところからも、一時期での全巻作製と見るのが自然であろう。因みに、襲用された植版の『荘子抄』での最終使用は、〇一〇30、◇後序2、△五29、▽八43となっている。

なお、傍証に用いた、阿波国文庫旧蔵『明徳記』原表紙裏張りの『荘子抄』摺遣りには、巻八も含まれているから、摺版襲用が認められず、二段階の製作があり得たとしても、その場合は最低でも巻八以降とすべきである。

疑問Bとして指摘を受けた、『荘子抄』の刊行者を陰山玄佐とする可能性の根拠は、先に示したように、製作工程の対立するⓐⓑグループにおいて、『荘子抄』は玄佐刊行が明らかな③④と共に、ⓐグループに認められる諸特徴を有していることにある。その特徴は、二兵衛刊行が明らかな⑤⑦⑧の属するⓑグループとは対立関係にある。従って、両者が摺版や摺遣りの授受を行うほどの協力関係にあったとしても、それに依って、『荘子抄』を二兵衛の単独乃至は両者の共同刊行とする仮説を立てるに足る左証とはし難いであろう。

鈴木氏の提起された疑問に対する私見は以上で、前稿の考察を補強するに留まり、改めるには至らなかった。この疑問は、『三体詩素隠抄』についての考察で述べられたものであるが、先に⑦として取り挙げた寛永三年版の製作工程についても、既に〈年報〉で触れるところがあった。今改めて摺版三面（●■▲とする）の配列

を記す。

架蔵本に拠る。巻名は版心の巻名を用いる。（×幾）は直上傍線部の反復植字回数を示す。

三体詩起●■●▲■（×4）計一四丁　三体絶句一■●▲（×3）■▲▲●（×10）■▲▲●■（×3）▲●▲■（×4）●▲計六五丁　三体絶句二●■■●▲（×4）■●■▲（×4）▲●（×2）▲▲●■（×2）▲■●（×4）計五〇丁　三体絶句三▲●■（×11）▲●▲■（×5）●▲計五一丁　三体絶句四●■▲●■●■▲■■■●■●■▲（×2）●▲■（×12）●計五六丁　三体詩二（之）上●■▲（×15）●■計四七丁　三体詩二之二▲●■（×7）▲●計二三丁　三体詩二之三■▲●（×19）■計五八丁　三体詩二之四▲●■（×17）▲●計五三丁　三体詩三之一■▲●（×3）▲●■（×24）計八一丁　三体詩三之二▲●■（×9）▲計二八丁　三体詩三之三●■▲（×15）●計四六丁　三体詩三之四■●▲（×11）■●■▲（×2）●計四一丁　三体詩三之五■▲●（×3）■▲■●（×11）▲■▲●（×3）■●計五五丁

右の製作工程は、版心の活字差替えや魚尾の損傷度合などから、起→七律（二之上～四）→五律（三之一～五）→七絶と推定され、律が巻の順に添っているのに対し、絶句は、摺版■の版心の書名が、三及び四55で「三体句絶」と顛倒しているところからも、一→二→四→三の順に植字されたと考えられるから、絶句三の巻末にある刊記は、全巻完成時のものであって、その意味では不自然ではない（〈年報〉二四三頁）。個別の事情は兎も角として、巻順に則らない植字は希有な事例ではない。

このことについて鈴木氏は、巻順に則った植字を前提に、全巻の「刊行の終了は寛永三年を越えていたのではなかろうか」（《叢考》一四九頁）とされたが、私見が否定されない限り、従えない見解である。

（日本語日本文学科　教授）

『三体詩素隱抄』摺版の推移　■●▲の順